

撮影現場インターンシップにおけるスケジュール不確実性への対処

- 澤田芳郎（小樽商科大学ビジネス創造センター）
- 野村邦彦（映画『きみはいい子』ラインプロデューサー）
- 木戸隆雄（小樽市産業港湾部観光振興室）

1. はじめに

2014年6月22日から7月15日にかけて、アークエンタテインメント株式会社（東京都渋谷区）は北海道小樽市・札幌市で映画『きみはいい子』（呉美保（オ・ミポ）監督、2015年公開予定）の撮影を行なった。同社はそれに先立ち文化庁の「平成26年度映画スタッフ育成事業」に応募して採択されており、これに則って地元の大学生等を撮影作業補助に起用することになっていた。作品のラインプロデューサーを務めていた野村邦彦はロケ現場選定に協力した小樽フィルムコミッション（小樽F C、事務局：小樽市役所内）に相談したが、同コミッションの木戸隆雄（小樽市産業港湾部観光振興室主査）は小樽商科大学で澤田芳郎が担当する映像制作授業でゲスト講師を務めたことがあった。その受講者の一部が学内の放送サークル「たるもじゅ」内に映像班を立ち上げて作品を制作し、同コミッション主催の短編映画コンクールに応募した経緯もあった。

小樽F Cから打診のあった5月19日以降、澤田は野村と連絡を取りつつ文化庁のスキームを調査し、明らかにインターンシップ制度であることから大学のキャリア支援課に持ち込んだ。アークエンタテインメント社が学生受け入れを前提に国の補助金を得るには同社と大学の契約が必要だったが、大学もインターンシップ先の確保の観点からこれに協力することになった。キャリア支援課は文化庁の事業委託先である協同組合日本映画撮影監督協会への契約書提出や学生の保険加入の確認を担当した。参加者を学内公募せず、単位取得とも無関係のインターンシップの扱いで澤田が学生への指導を担当することも決まった。インターンシップでは早朝深夜勤務はありえないが、映画撮影現場の特性を鑑み、21時までの現場滞在を可とした。

2. スケジュール不確実性への対処

澤田は日頃から接していた「たるもじゅ」の3年生数名と準備を進め、現場滞在時間も記入できる全員日程表のフォーマットが完成した6月1日に参加者のメーリングリストを設置した。当初は6名だったが、希望者が現れるたびに追加登録した（一部は「たるもじゅ」以外）。学生の出勤希望日と撮影スケジュールのすり合わせは、①基本的に希望日をそのまま了承したうえ、②撮影場所の都合で受け入れ人数に制約のある日については機会の少ない者を優先した。出勤は6月19日の撮影準備から始まった。参加した1～4年生18名（最終的に日程が合わなかった2名を含む）には出勤1回について1本のレポートを要請し、その配信によって経験を共有することにした。澤田も可能なかぎり現場に赴いて状況を把握し、スタッフのコメントもまじえて解説を配信した。

しかしこの方法も出勤日時管理には十分でなかった。もとより映画撮影はスケジュールの不確実性が高く、天候の影響はむろん、ロケ先の事情や監督を中心とするクリエイティブな要因から作業の時間帯と場所の決定がどうしても前日夕方になる。一応の撮影計画はクランクイン前に立てられていたが、ほぼそのまま実行されたのは最初の8日間だけで、その後については大きな変更がありうる事が事前に予告されていた。撮影場所が決まらなければ、学生の現場入り時刻もはっきりしない。学生の側も飲食店アルバイトのシフトが決まるのが勤務直前になる近年の傾向から、スケジュールリングに難のある者が少なくなかった。

これに対して制作会社側は学生の携帯電話に直接連絡を入れることを希望したが、安全確保の点で大学および小樽F Cとして遠慮していただいた。代わりに大学側から提案して了承を得たのが、

毎日夕方に発行される翌日の「香盤表」（シーンの撮影順やキャストの配置を含む作業予定表）をメーリングリストに流し、学生自身が出動時刻に合わせて場所を判断する方式であった。スキャンと送信は撮影にアテンドしていた木戸ら小樽FCの担当者が帰庁後に行なうことが多かった。出動先はおおむね事前通知されていた11か所のいずれかであったが、時刻との関係で判断が微妙な場合は野村やその部下の携帯電話にかけてよいことにした。さらに澤田が適宜介入してバックアップにあたった（予定変更にもかかわらず野村が携帯電話を紛失して連絡がつかなかった数時間のほか、撮影が小樽札幌間で急遽変更されたケース、撮影日と撮休日が直前に入れ代わったケースが特にクリティカルであった）。学生の出動は出動者16名について計52回、すなわち平均 3.3回（最少1回、最多9回）で、現場滞在は1回平均 4.5時間（最短1時間、最長11時間）に及んだ。

3. 学生レポートに見る成果

学生は撮影現場の各種業務（小道具作成、資材運搬ほか）に従事する一方、ほぼ同じ長さの時間を見学にあてることが許された。学生のレポートは出動52回に対して35本配信され、1本の分量は結果的に 400字～1600字程度。メーリングリストは教員、学生と小樽FCのみで構成し、制作会社やスタッフに対する批判も歓迎したが、その種の配信はなかった。澤田は現場状況に基づいて学生への注意事項を遠慮なく配信する一方、執筆者の個別了解を得てプリントアウトを10本程度ずつまとめ、スタッフに提供した。学生のレポート例（一部抽出）は次のとおり。

- 見学させていただいた1時間、カメラの位置は変わりましたが、最初から最後まで同じ場面の撮影でした。短いシーンのためにそれほど時間をかけて撮影されることが驚きでしたし、一切妥協のない現場だと感じました。全員が同じところを見て同じところに向かう理想的な仕事場だと思いました。（1年・女）
- 制作部の方から「カット割り」について教えていただきました。①あるシーンの撮影前に打ち合わせをしていたら、それがカット割り。②マンガのコマと同じように、シーン内の各動作について監督から詳しく指示が入る。③これを撮影・照明・録音・俳優が聞き、リハーサルに移る。④現場によっては絵コンテを用いるが、呉組では口頭のみ。（4年・男）
- 私自身が作成した小道具が実際に撮影に使用されたことには本当に感激しました。スタッフの方々には深く感謝しています。私自身の希望進路が映像制作に携わることなので、今回の参加で感じた現場の空気は非常に価値のあるものでした。（1年・男）

4. おわりに～「界面」としてのインターンシップ～

映画の撮影プロセスは複雑にして不安定である。計画を立てる必要はあるが、それを厳密に実行しようとするれば、進行はむしろ阻害されるだろう。現場は大きな流れを全員で共有しながら各自が他者や他セクションの動きを観察し、取るべき行動をそれぞれ計算、実行して、その結果生じた実際のプロセスが検証機会でもあるという究極のコンカレント性に貫かれている。したがって当該プロセスと学生生活ないし大学システムの「界面」に成立する撮影現場インターンシップにおいては、スケジュール不確実性への対処が本質的である。参加学生にはかかる現場に一瞬でも触れたことを職業人としての将来に役立ててもらいたく、また適性のある若者が少しでも映画界を志してくれることを期待している。

付. インターンシップ参加学生

安藤健志郎、砂金祐佳、石原小百合、庵彩乃、奥山彩乃、小竹彩夏、佐々木優斗、須貝洋介、鈴木もも子、曾我部悠作、高橋なな、高橋諒、高橋瑞季、畑賀大、三浦晴華、森達哉、森野浩平、横濱大成（五十音順）